

〈道徳教育〉

生命尊重の心を育て自己の生き方を考える道徳の時間 ——心に響く授業の工夫を通して——

沖縄市立北美小学校教諭 島袋孝治

I テーマ設定の理由

「平成19年度における児童生徒の問題行動等の実態」(文部科学省)によると、いじめが101,127件、暴力行為が52,756件、自殺が158件という統計結果が出されており、ここ数年、多発傾向にある。こういったいじめや暴力行為、自殺等は、生命や存在そのものを軽んじている行為だといえる。学校教育においては生命尊重の教育をこれまで以上に充実させる必要がある。

改正教育基本法に、新たに規定された教育の目標第2条(4)に「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」とあり、それをふまえて、新学習指導要領(平成20年3月文部科学省)に、すべての学校段階において共通する重点として、生命尊重をおさえている。

沖縄県教育委員会が示している「学校教育における指導の努力点」(2008)の「道徳教育の充実」においても、「児童一人一人が豊かな人間関係を築き、自らの人生をよりよく生きていけるようにするためにには、自他の生命を尊重する心を基盤として—」と記されており、生命を尊重する教育の必要性が指摘されている。これらのことから生命を尊重する心の育成が一層重要視されている。

本学級の子どもたちに、実態調査を行ったところ、「命はとても大切にしなければならない」という質問に対し、「とてもそう思う」が全体の82%、「そう思う」が18%であった。その理由として、「命は一つしかない。」「命がないと生きられない。」「家族が悲しむ。」等が理由としてあげられ、命は大切なものであると考えている。しかし、子どもたちの会話の中で、自他の生命や存在を軽んじるような言動も多く、互いに注意しあうことなく会話が成り立っているのも事実である。「あなたの言葉で、友達を傷つけていることがあるか。」という質問に対し、「とてもある」が21%、「時々ある」が46%。また「友達の言葉で、あなたは傷ついたことがあるか。」の質問でも、「とてもある」が14%、「時々ある」が39%となっており、互いに傷つけあっていることが分かる。とくに気がかりな言葉が「死ね、ころす、きもい、うざい、きえろ」等であり、安易にそれらの言葉を使っている状況がみられると言える。「命は大切だ。」と分かっていても、実際に自他の生命を尊重する態度が身についていなかったり、生きることの価値については考えたことがない状況であると言える。

これまでの私の実践を振り返ると、朝の会や帰りの会等で生命に関する本や新聞記事等を紹介したり、生命と自然との関係を意識した説話等は行ってきた。道徳の時間は、副読本等の読み物資料を通して生命尊重の授業を行ってきた。しかし、読み物資料の流れを追う授業になったり、事前に実態把握もできないまま授業をすることがあり、ねらいとする価値に対し、深まりのある授業実践であったのか疑問が残る。

道徳教育の要となる「道徳の時間」において、子どもの心に響く授業にしていきたい。授業を展開する中で、子ども一人一人の道徳的価値の自覚を促し、自他の生命を尊重する心を育て、他者とのかかわりの中で自分がどう生きていくのか、どう生かされているのかを考えさせたい。

そして、心に響く授業実践をするには、やはり、資料選定から資料提示、発問の工夫、終末のまとめ方等、様々な場面の工夫が大切となる。また、道徳の授業をどうつなぐのかも重要だと考える。そのような授業の工夫改善を行うことによって、子ども一人一人の心を揺さぶり、生命尊重の心を育て、自己の生き方について考えることができるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

道徳の時間において、「生命尊重」と「理想・努力」との関連を図り、効果的な資料選定、提示、発問、導入・展開後段の工夫や、自己を見つめさせるための書く活動を取り入れることにより、生命尊重の心を育み、自己の生き方について考えさせることができるであろう。

II 研究内容

1 「生命尊重の心」について

(1) 「生命尊重の心」とは

東京都杉並区立八成小学校副校長、村山哲哉(2005)によると、「生命を尊重する心」とは、生きることに喜びを見いだし、自らの生命を大切にするとともに、他者の生命も同様に尊重する心情や態

度だとしている。

また、小学校学習指導要領解説「道徳編」（平成20年3月）（以下、解説「道徳編」と表記）においても、生命尊重について、次のように示している。

低学年…生きることに喜び、生命を大切にする心をもつ。
中学年…生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
高学年…生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。

本学級の児童が高学年であることから、生きることの喜びや生命の尊さを感じる中で、生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する心情を高めたい。

（2）発達段階に応じた指導

現文部科学省初等中等教育局教科調査官の永田繁雄（2007）は、「子どもたちの発達と健康に応じて自他の生命を尊重する心を育てる指導の充実を図る必要がある」とし、発達段階に応じた授業の工夫や道徳的実践力の育成についての重要性を述べている。

そこで、道徳性や命、死の意識についての発達段階をふまえ、授業作りを行う。

① ピアジェによる道徳性の発達段階

ピアジェによると、発達段階の特徴や道徳的判断の発達段階は、表1のようになる。

表1 ピアジェによる道徳性発達段階

時期	前操作期（6才以前）	具体的操作期（7～11才）	形式的操作期（11～15才）
発達段階の特徴	言葉の使用が可能となり、その言葉や概念を具体的な事物と関連させて理解することが課題となる。	自己中心性も脱していく段階で、自分の活動が他者に与える影響を考慮することも可能。社会的な相互作用を理解する基礎が形成される。	自由に概念・知識・イメージを頭の中で操作して創造的活動を行うことが可能になる。
道徳的判断の発達	大人の命令や禁止が万能になる。	＜目には目を＞式の互酬性の道徳が発生する。	その都度の状況を考慮するようになり、相互に許しあうことができるようになる。

② 「子どもの死や命の意識」の発達段階

近藤卓（2007）は、子どもたちの「いのちの意識」がどのような発達段階なのか、その段階に応じたプログラムを考えていかなければならないと考え、表2のように示している。

表2 子どもの「いのち」の意識について

いのちの教育の段階1 ～保育園・幼稚園・小学校低学年～	いのちの教育の段階2 ～小学校高学年・中学校～	いのちの教育の段階3 ～高等学校・大学～
死の概念が十分確立されていない。自然、家族、動物、植物等のふれあいを深め、それを体感することで、生きていることの幸せを確認することが課題となる。	いのちの死を見つめることを通して、不安、恐れ、孤独、悲しさ等を体験することが増え、同じように感じている仲間がいることを知り、感情を共有し「棚上げ」（問い合わせを脇に追いやること）を学ぶことが課題となる。	具体的に自分の存在意識を問い合わせることの意味を求める。なぜ生きているのか、何を目指していくのか、といった現実的な課題が中心となっていく。

③ 内容項目「生命尊重」の指導の観点

解説「道徳編」においても、価値項目「生命尊重」を指導するにあたって、低学年や中学年高学年では、次のように指導することを目標に掲げている（表3）。

表3 発達段階に応じた「生命尊重」の指導の観点

低学年	中学年	高学年
生活経験の中で生きていることを感じ取ることが中心となる。 「生きている」「生きていることの喜び」を見いだすことによって生命の大切さを自覚できるようにする。	現実性をもって死を理解できる。喜びや悲しみを通して、自分の生命の尊さに気づき、同様に生命あるものすべてを大切にしようとする。	生命の誕生から死に至るまでの過程を理解できる。自他の生命を尊重し力強く生き抜こうとする心を育てるとともに、生命への畏敬の念をもつことができる。

小学校高学年の発達段階で、死に至るまでの過程を理解できることや、死への不安、恐れ、悲しさ等を共有できることをふまえ、死の重たさや生きることの尊さについて考える内容で授業づ

くりを行う。

2 「自己の生き方を考える」について

(1) 「自己の生き方を考える」とは

道徳の時間の目標に、「自己の生き方についての考えを深める」という文言が、新しく加えられ、「道徳的価値の自覚及び自己の生き方について考えを深め」とし、児童が自己の生き方に結びつけて考えてほしいとの趣旨を重視している。解説「道徳編」によると、「自己の生き方を考える」とは児童が、「日々の生活の中で、自分を振り返り、自分のよさについて考え、自立した生活をつくろうとする。また、受け止めた自分らしさをふまえて、これから自分の自分に夢や希望をもち、社会的自立に向けてよりよい生き方をしようとする」ことだとし、以下の3つを強く意識して指導することを重要視している（表4）。

表4 自己の生き方について考えを深めるための指導について

- | |
|-------------------------------------------------------------------|
| ○ 児童がよりよくなろうとする自分を感じ、自己を肯定的に受け止められるようにする。 |
| ○ 他者とのかかわりや身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめるようにする。 |
| ○ 現在の生活及び将来の生き方の課題を考え、それを自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようとする。 |

(2) 「自己の生き方を考える」ための関連的取り扱いの工夫

解説「道徳編」第3章の道徳の内容の取り扱いにおいて、「道徳の時間の指導にあたっては、項目間の関連を十分に考慮しながら、指導の順序を工夫したり、内容の一部を関連付けたりして、実態に応じた適切な指導を行うことが大切である」と、その重要性について述べている。

例えば、生命尊重の心を育成することは、他者への思いやりをもつこと（思いやり）、多くの人々に支えられ生かされていることを自覚すること（尊敬・感謝）等と関連するということであり、その指導の順序も工夫する必要があるということである。

これまで「生命尊重」のみで研究を進めていたが、アンケート調査をもとに児童の実態を把握した結果、「生命尊重」と「理想・努力」とを関連的に取り扱うこととした。3の(2)「生命尊重」において、生命はかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重することや自らの命を大切にするために、精一杯生きることについて考えさせる。次に、1の(2)「理想・努力」においては、より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力することにつなげる。

このように、「生命尊重」と「理想・努力」を関連的に取り扱うことで、児童に、精一杯生きることについて考えさせることを通して、自他の生命を尊重することや、夢や目標に向って努力するとの生き方までも考えさせたい（表5）。

表5 関連性・発展性を取り入れた「道徳の時間」の2時間構成

〈第1次〉	3-(2)生命尊重	〈ねらい〉 生きていることのすばらしさを知り、生命の尊さに改めて考え、生命を大切にしようとする心情を高める。
〈第2次〉	1-(2)理想・努力 関連価値 3-(2)生命尊重	〈ねらい〉 一生懸命生きようとする登場人物の生き方を通して、生きることの喜びと人は周りの支えがあってこそ生きていけることを感じたり、目標に向かって精一杯努力しようとする心情を育てる。

3 心に響く「道徳の授業」の工夫

(1) 心に響く「道徳の授業」とは

道徳の時間が道徳教育の要であり、道徳的行為への動機として強く作用する道徳的心情を高めるためにも、心に響く授業が求められる。では、心に響く授業とは、どんな授業なのか。平成16～18年度佐倉市教育委員会指定道徳研究校の染井野小学校においては、平成20年度の道徳研究において心に響く授業を表6のように示してある。

表6 心に響く授業の条件（平成20年度 千葉県佐倉市立染井野小学校道徳研究資料より一部抜粋）

- | |
|------------------------------------------|
| ① 児童の考えを再認識させたり、新しい考えに気付かせたりする授業。 |
| ② 児童の心を揺さぶり、それにより道徳的価値に気付き、自覚することができる授業。 |
| ③ 道徳的価値と自分との具体的なつながりに気付かせる授業。 |
| ④ 道徳的実践力を育てることができる授業。 |

表6を参照に、心に響く「道徳の授業」の工夫として、①②の視点から資料選定、提示、発問、そして、③の視点から導入・展開後段の工夫を行う。

(2) 心に響く授業の工夫

① 資料の選定

解説「道徳編」の「第5章 魅力的な教材の開発や活用」の中に、道徳の時間に用いられる教材の具備すべき要件が挙げられている。その要件をふまえ、さらに具体的に以下の6つの要件を具備する教材を選択することで、児童が学習に意欲的に取り組み、学習への充実感をもち、道徳的価値の自覚を深めることができると示されている（表7）。

表7 道徳の時間に生かす教材として、選択する際の具備する教材の要件

ア 児童の感性に訴え、感動を覚えるようなもの。
イ 人間の弱さやもうさに向かい、生きる喜びや勇気を与えてくれるもの。
ウ 生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えさせるもの。
エ 体験活動や日常生活等を振り返り、道徳的価値の意義や大切さを考えることができるもの。
オ 悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題について深く考えることができるもの。
カ 多様で発展的な学習活動を可能にするもの。

その中で、「ウ 生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えさせることのできる資料」の要件から、下記の資料を選定した（表8）。

表8 選定した資料

内容項目	資料名	内 容
生命尊重 3-(2)	「りかに命をわけてください」 —かがやけみらい— (学校図書)	○ごく普通の中学生の女の子が、白血病に侵されるが、最後まで生きる希望を捨てずに精一杯生きようとする実話資料。 ○日記…自分の体に異変を感じ、次第に悪化する体に不安や恐怖を感じている様子が書かれている。 ○詩……「命」。
理想・努力 1-(2) 関連価値3-(2)	「最高で金メダル、最低でも金メダル」 —新しい道徳— (光文書院)	○女性柔道家・谷亮子選手が五輪の金メダル獲得の目標に向って幼い頃から高い目標をもって、精一杯生きぬく姿と、夢実現が達成できた根拠には、日々の努力と周囲の人達への感謝の気持ちが表れている実話資料。

資料「りかに命をわけてください」は、「生命はかけがえのない大切なのだ」と頭では分かっていても、普段の学校生活の中で、命を軽視する言動が見られる児童に、生きたいと願い続けたりかの思いに共感させることで、生命の尊さについて改めて考えることができるととらえる。

上記の2つの資料は、実話に基づいた資料である。実話を活用することにより、子どもにとつて真実味があり深く考えていくと思われる。とくに資料「りかに命をわけてください」の主人公は、中学3年生という若さで亡くなるが、本学級の児童とも年齢が近く、身近に感じることができると考える。実話資料の持つ迫力と、場面ごとに主人公の気持ちをとらえさせることにより、資料の世界に浸り、価値の大切さに気づき、それを自分の日々の生き方につなげるきっかけとなるととらえる。

② 読み物資料の分割提示

資料「りかに命をわけてください」について、今回は、資料中の日記は活用せず、読み物資料を、3つの場面に分割し提示する。

これは、資料の読み取りに終始せず理解を助け、授業に対する期待感を高め、話の展開を自分の経験と照らし合わせ考えさせるためである。

- | |
|--------------------------------------------|
| 場面① 「りかは中学3年生。スポーツ好きで、バレーボールのキャプテンとして活躍」。 |
| 場面② 「白血病で入院。病状は悪化するが、最後まで生きる希望を捨てないりかの様子」。 |
| 場面③ 「生きたいという思いで、りかが書いた詩『命』」。 |

③ 導入・展開後段の工夫

導入の工夫として、事前アンケートの結果（将来の夢や現在頑張っていること）を活用し、資料の主人公（りかはバレーボールのキャプテンを務め、リレーや水泳で活躍している）をより身近に感じさせる。それから展開へとつなげていく。導入のアンケート結果は展開に入るための手段と同時に、展開、終末すべてにかかわってくる。展開後段の場面においては、再度、導入のアンケート結果に戻り、自己を振りかえさせ、生命について改めて考えさせたい。それが、「心に響く授

業の条件③④」にある道徳的価値と自分との具体的なつながりに気付かせ、道徳的実践力を育てる授業になるであろうと考える。

また、解説「道徳編」第7章に「家庭や地域社会との連携による道徳教育の中に、より効果的な授業実践方法」として、児童へのメッセージを語る講師の役割を担う地域の人々や団体等の協力を得るとある。

そのため、「りかに命をわけてください」では、主人公であるりかの母親の立場と同じ経験をした保護者に、子どもへの愛情や日常の何気ないことの大切さ、生命の尊さ等について語ってもらう。実話資料にまつわる内容と結びついた人材を発掘し、ゲストティーチャーとして活用することは、道徳的価値を深める上で、有効な手立てだと考える。

④ 書く活動

解説「道徳編」第5章の「道徳の時間に生かす指導方法の工夫」にも、書く活動の重要性が挙げられている。永田繁雄(2005)は、道徳教育における書く活動の意義について表9のことを挙げており、道徳の時間で子どもが自己と対峙して書くことは、生きることの感じ方、考え方を豊かにしていくことであり、自分らしい生き方や夢、あこがれに目を開き、それを自分の心に刻み込んでいくことでもあると説明している。さらに「資料や話し合いに感動し、考えや心情が深まれば深まるほど、子どもは自分自身を率直に見つめ語ることができるようになるはずである。」と述べている。

そのため、授業では、資料を読んだり、聞いたり、話し合ったりするだけでなく、自分の考えを書く活動を、意図的に取り入れる。資料をもとに考えたことや自己を振り返って思ったこと等をワークシートに書くことによって、子ども一人ひとりに自己を見つめさせ、自己内対話を深めさせる。

⑤ 発問の工夫

児童の多様な発言を引き出すために、終始、共感的理解でとらえる。また、教師の発問は、子どもの思考や話し合いを深める決め手になると想え、どの場面で発問をし、ねらいに向ってどのように児童の発言をつなげていくかを、教師が資料分析を通して考えておく必要があるととらえる。そのために、中心発問や基本発問だけでなく、この2つの発問が活きるための補助発問も大切であると考える。場合によって、児童らから引き出したい発言が出てこない時には教師側から投げかけることもありうる。展開後段で「家に帰りたい！」と泣き叫ぶりかの気持ちに対して、りかがあきらめようとする悲観的な考え方と、逆に精一杯前向きに生きたいと願う考え方の両方の意見が出ることが予想される。両方の考え方を引き出し、互いのとらえ方の違いを知らせる中で、りかの思いについて更に考えさせる。また、第2次では、中心発問「谷選手の夢が叶ったのは、なぜでしょうか？」で、夢実現のために努力することはもちろんのこと、夢を実現するまでの過程には、周囲で支えてくれる多くの人たちの存在も大きいということにも気づかせるようにする。その際、共感したり、切り返しの発問を行う。そこから、より考えを深められるようにしたい。

III 指導の実際

1 検証授業

- (1) 主題名 「かけがえのない命」 内容項目 3－(2)〈生命尊重〉
- (2) 資料名 「りかに命をわけてください」 (道徳副読本—かがやけみらい—(学校図書))
- (3) 本時のねらい

生きていることのすばらしさを知り、生命の尊さに改めて気づき、生命を大切にしようとする心情を高める。

- (4) 授業仮説

実話であるりかの生き方を資料として取り上げ、3回に分けて資料を提示し、発問や導入・展開後段を工夫することで、病気と懸命にたたかい生きようとしたことや、やりたいことを持ち命ある限りやり通そうとしたりかに共感させ、りかへの思いや自分の今こうして生きることについて思いを書かせることで、生命の尊さについて考えることができるであろう。

表9 道徳教育における「書く活動」の意義

- | |
|------------------------------------|
| ・ 自己を集中して見つめる場になる。 |
| ・ 自分の感じ方や考え方が明確になる。 |
| ・ 発表したいことを吟味、再構成できる。 |
| ・ 相互に見合い、学び合いが豊かになる。 |
| ・ 考え方の変化等の自己評価に生かすことができる。 |
| ・ 発表は苦手でも書くことが得意な子どもにとって表現が一層促される。 |
| ・ 書くことで開放感を味わう。 |

(5) 本時の授業

過程	学習活動と発問	予想される発言	教師の働きかけ
導入	1. 事前アンケートの結果を知る。 ・互いに傷つけあう言葉 ・今 頑張っていること 2. 場面1について考える。 ○健康でスポーツでも活躍のりかさん。どんな子だと思いますか。 ○実は入院しました。なぜだと思いますか？	・死ね ころす きもい ・将来の夢はデザイナー ・野球部で練習を頑張っている ・明るい性格 しっかり者 ・健康 ・皆に信頼されている ・かぜ 癌 骨折	○事前アンケート結果をもとに、どれだけひどい言葉を使っているのか意識させる。 ○頑張っていることを引き出すことで、りかに対する共感を高める。 ○資料の前半部分を拡大掲示資料として用いて視覚的にわかりやすく説明する
展開前段	3. 場面2について考える。 ○あなたが白血病と言わされたらどう思いますか？	・こわい いやだ ・死にたくない ・治ると信じてる ・病気を認めたくない	○資料を配布。ここで初めて題名を見せ範読し実話資料だという事を知らせる ○白血病について簡単に説明することで理解を助ける。
展開後段	○弱音をはかず、つらい治療に耐えたのは、なぜでしょうか。 ○りかが明るく振る舞っていたのは、どんな気持ちからでしょうか。 ○「帰りたい」と泣き叫んだりかは、どんな気持ちでしょうか。	・心配かけたくない ・もっとつらくなる ・生きたい、死にたくない ・くやしい 悲しい ・もうだめかもしれない ・生きたかった ・簡単に命を捨てないで ・生きた証を残そう	○自分も不安な状況でありながら、周囲の人と明るく接しているりかの心情について深く考えさせる。
終末	4. 場面3について考える。 ○詩「命」には、りかのどんな思いが込められていると思いますか? 5. ゲストティーチャーの話を聞いて考える。 6. 自分自身を振り返って、生命の尊さについて考え、ワークシートへ書く。	・りかの分まで生きたい ・命を大切にしなければならない ・命があるからいろんなことができる	○あきらめ等の悲観的な考え方と、決して希望を捨てようとしない考え方の両方の捉え方を引き出し、話し合わせることで考えを深めさせる。 ○りかやゲストティーチャーの話から生きていることの有難さや前向きに生きることについて再認識させる。 ○りかやゲストティーチャーについて思ったことや、今までの自分を振り返って命の尊さやどのように生きるのかを考え、書かせるようにする。

2 研究仮説の検証

検証1、検証2とともに、「自分・友達・親・命に関するアンケート」の授業前・授業後の比較やワークシートの児童の考え方から、生命尊重の心を育て、自己の生き方を考えることができたかを検証する。

(1) 検証の視点1：効果的な資料選定、提示、導入・展開後段の工夫をすることによって、自他の生命を尊重する心情を育てることができたか。

① 効果的な資料の選定と提示の工夫

授業前のアンケート結果では、「命を大切にしなければならないと思いますか。」という質問に対し、「とてもそう思う」と回答した割合は82%、「そう思う」が18%となっており、全員が大切だと思っている。しかし、「死ね、ころす、きもい、きえろ」等の命を軽んじる言動によって自分も友達も傷つくことがあるとしている児童が67%いた。

このことから、生命を大切にしなければな

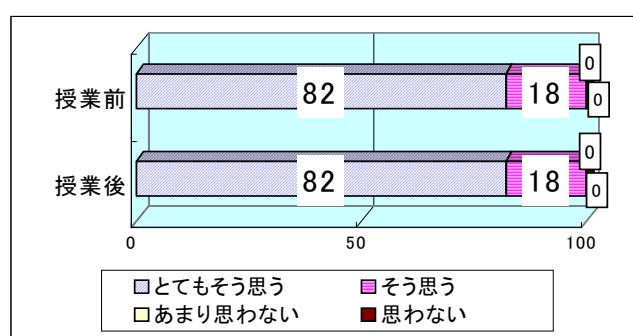


図1 命を大切にしなければならないと思いますか？

らないことは、頭では理解していても心で感じることが不十分だと考える。そのため、実話資料である「りかに命をわけてください」を選定した。

提示の工夫として、資料を分割して提示し、教師の語りや範読を取り入れながら発問を行い、児童の多様な意見を引き出した。後半に、りかが死ぬ間際に書いたとされる詩「いのち」を拡大して黒板掲示し、生きたいと願う思いを感じとらせるようにした。

図1の結果から、授業前後で変化はなかった。しかし、「なぜ、命を大切にしなければならないと思いませんか?」という質問に、授業前は「命は一つしかないから。」「命がないと生きられないから。」等の回答がほとんどであったが、授業後は、「生きたくても生きられない人がいる。命は大事。今日の授業でそう思いました。」「命は自分だけのものじゃないから。」「親がせっかく生んでくれたし、がんばって生きている人もいるから。」等の考えが出され、命の大切さについての考えが深まってきたととらえる。

表10 授業後の感想

児童A	ぼく達は、ちょっととしたことで「死ね、ころす」と言うことがある。だけど、今考えたらとてもいけないことだと感じた。「りかに命をわけてください」の、りかさんのように、世界では病気で苦しんでいる人や死んでいく人もいる。命は自分だけのものじゃないから、だから、みんなが命を大切にしてほしい。
児童B	命は本当に大切だと思った。ぼくは、「死にたい」と思ったこともあったし、友達にも「死ね」って言ったことがある。でも、人が死にたくないのに病気や事故で命をなくす人もいる。だから、ぼくはわがままだな。命をそまつにする事を言つてはだめだと感じた。命は分けられない。ぼくは、命を大切にして最後まで生き続けたい。
児童C	今日の授業を聞いて、りかが白血病にかかってつらかった。私は生まれて初めて、命は本当に大切だなと思った。命があることは奇跡。だからみんなの命も大切にしていきたい。
児童D	今日の授業で、命って本当に大切なんだと思った。でも、新聞やテレビのニュースを見ると、自殺したり、人の命をうばったりする人がいることは、とても残念なことだと思う。病気になって、苦しんで死んでしまう人もいるけど、私たちが生きているって、すばらしいことだと思った。だから、どんなに苦しいことがあっても、すぐに命を投げ出さず希望をもち、幸せに生きていきたい。みんなが命を大切にしてほしいです。
児童E	題名を見たとき、どういう意味だろうと思った。でも、読んでいくうちに少しづつ意味が分かつてきただ。一番心に残ったのは、りかさんが最後に「家に帰りたい」と泣きさけんだ場面。自分が生きていることは、とっても幸せなことなんだなと、今日の授業でそう思った。生きたくても生きられない人がいるから、私はせいいっぱい生きたい。

表10の児童A「ちょっととしたことで、死ね、ころすと言うことがある。今考えたら、とてもいけないことだと感じた。」、またBは「命をそまつにすることを言つてはだめだと感じた。」等、生命を軽んじた言動に対し、これまでの自分の行いを反省する内容が見られた。

児童C～Eは、「生まれて初めて命は本当に大切だなと思った。」「生きているって、すばらしい。みんなが命を大切にしてほしい。」「せいいっぱい生きたい。」等のように、命の尊さや生きていることに喜びを感じている内容である。

また、表11にあるように、授業後の「人を傷つけないように」「みんなで助け合って、自分や人の命を最後まで大切に」や「周りの人を大切にして」等のように、自己の生命だけでなく、他者の生命をも大切にしていることを願う心情が授業前に比べて、高まっている。

図2「友達に対しての言動に気をつけようと感じたことがある?」の質問

では、「とてもある」が授業前の14%に対し、授業後は32%に増えた。授業前に比べ、言動に気をつけようと考えが変わった児童は、「たとえんかしても、やっぱり友達がいると楽しいから。」「なんかの理由で命が短い人もいるってことが分かったから、平気で死ねとか言ってはいけないと思うようになった。」等の理由を書き加えてあった。

しかし、図2で「全くない」と回答した児童は、授業前後で14%から7%になったものの、「相手が悪いことしたら、自分だって(つい傷つける言動を)やってしまう」と正当化している。この

7%の児童は、「あなたにとって、友達は大切ですか。」という質問に対して、「とてもそう思う」とし、その理由には「友達は自分が困ったときにはたすけてくれる。」「友達がいるから楽しい。」と回答している。

また「自分は、よく友達に文句を言ってけんかになってしまう。自分が悪いのは分かっている。」と応えている。よって、自他の生命を尊重することの継続的な取り組みとともに、自分の過ちを正当化してしまうことについて、思いやりや寛容・謙虚との関連を図りながら、他者とのかかわり方を身につけさせる等の手立てが必要だと考えられる。

② 導入・展開後段の工夫

何事にも一生懸命で、目標をもってのびのびと学校生活を送るりかの思いに共感させたり、展開後段で自分をふり返って考えさせたりするために、導入で「将来の夢や、今がんばっていることはなんですか？」と発問したり、事前アンケート結果をもとに、「学級のほとんどの人が夢や目標を持っている。」ということを知らせた。

展開後段には、ゲストティーチャーの「普段の何気ないことを大切にしながら、せいいっぱい生きてほしい。」という話を聞かせながら、自分自身のことを見つめさせ、その後、「もう一度、自分が頑張っていることについて考えてみよう。」と、ふり返らせた。なかには感極まって涙を流す児童もいた。表12は、導入・展開後段の工夫に関わる児童の感想である。

表12 授業後の、生命に対する児童の感想

○導入・展開後段の工夫により、自分自身をふり返った感想	<p>○いやなことがあっても、命をむだにしない。ぼくは、将来プロのバスケット選手になりたい。だからバスケット部の練習ももっとがんばりたい。つい友達の悪口言ったりするけど、みんなもいやだと思う。もっと友達を大切にしたい。</p> <p>○私は、将来、デザイナーになる。きっと、りかさんも将来なりたかったものがあったと思う。だから、なりたい夢があるってしあわせ。生きたくても生きられない人の分まで、命は大切にしたい。</p>
○ゲストティーチャーの話にふれて生命の尊さを感じている感想	<p>○ゲストのお母さんは、とても勇気を出して話してくれたと思う。だから簡単に『死ね、ころす』なんて言葉は使ってほしくない。人は生きていて、どれだけ幸せかをわかってほしいと思いました。</p> <p>○今、生きていることがふつうと思っていた。話を聞いて、今までふつうに感じていたことがすごいことなどと気付いた。天国に行った子は、歌も歌いたかっただろうな。学校も喜んで通いたかっただろうな。だから人は簡単に命をすべてではない。今、生きている。それはすごいことなんだ。</p> <p>○私は、命があるって、あたり前のことだと思っていた。でも、(ゲスト)の話を聞いて、つらい思いをして生きている人、強く生きている人、家族や友達に心配かけず一生けん命に生きている人など、いろんな人達が、命を大切にしていけたらいいなと思いました。</p> <p>○「人は一人では生きていけない」という言葉を聞いた時、その通りだと思った。だれかに支えあって生きていくものだと思う。娘のAさんの分も、自分たちは命を大切にしていかないとダメだなと思った。</p>

表12にあるように、「練習ももっとがんばりたい。もっと友達を大切にしたい。」「なりたい夢があるのはしあわせ。命を大切にしたい。」等、自分の目標を改めて見つめ直すことができたと考える。また、ゲストティーチャーの話を聞いて、「簡単に『死ね、ころす』なんて言葉は使ってほしくない。生きていてどれだけ幸せなのかを分かってほしい。」「今、生きていることがふつうと思っていた。それは、すごいことなんだ。」「命があるって、あたり前のことだと思った。いろんな人達が、命を大切にしていけたらいい。」等から、生命の尊さについて、心で感じとっている様子がうかがえる。

以上のことから、効果的な資料の選定、提示、導入・展開後段の工夫をすることにより、児童の心を揺さぶり、自他の生命を尊重する心情を高めることができたのではないかと考える。

- (2) 検証の視点2：効果的な資料の選定、提示、発問、導入・展開後段の工夫、書く活動を取り入れることによって、自己を見つめさせることができたか。

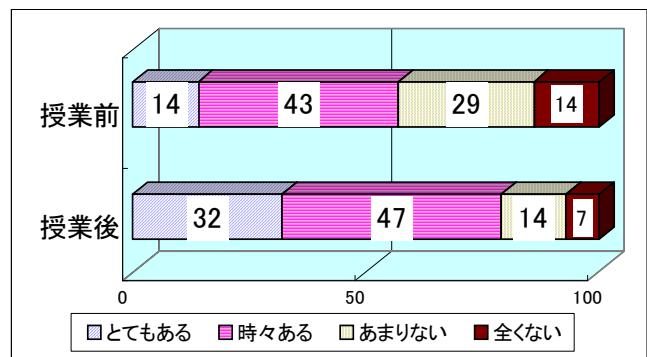


図2 友達に対して、言動に気をつけようと感じたことがありますか？

① 資料の選定、提示、発問の工夫

第2次は、「理想・努力」の実話資料「最高で金メダル、最低でも金メダル」を選定した。

展開前段で谷選手の幼少時から現在までのあしあとを年表で提示することで、谷選手の業績や努力する過程を分かりやすくとらえさせることができた。

発問「決勝で敗れた谷選手の気持ちを考えてみよう。」では、「とてもくやしい。」「柔道をやめたくなるよ。」等、谷選手の気持ちになつて発言していた。

そして、提示の工夫として、今回はビデオ視聴を取り入れた。谷選手が遂に念願の金メダルを勝ち取った試合の様子をビデオ視聴させると、「試合に勝った瞬間は、とても感動した。」「最高にうれしい。谷選手って、かつこいい。」等、谷選手の気持ちに共感していることがうかがえる。

また、中心発問「夢がかなったのは、なぜでしょうか？」では、表13の授業後の感想にあるように、「ぼくもだれかに支えられている。谷選手のように、テニスの練習だけでなく、宿題も手伝いちゃんとできるようにしたい。」「周りの応援があるからこそ野球もできる。応援してくれる人のためにもがんばる。」等、目標を持って努力することや、他者とのかかわりを大切にし、ともに支え合つて生きていることに気付いた内容であるととらえる。

② 導入・展開後段、書く活動の工夫

表14の導入時の児童の声にあるように、「水泳選手になるなら、スイミングも一日も休まず、泳ぎの練習をする。」「漫画家になるなら、絵を描く練習をやればいい。」等、「夢実現に必要なもの=夢に関連した練習」が多くあった。展開後段で、谷選手の夢実現までの努力する姿や思いを通してもう一度、自らの夢についてふりかえらせ、書く活動を通して、夢実現のためにどうすればいいのかをじっくり考えさせた。その結果、表14の展開後段時の児童の感想にもあるように、「すぐにあきらめことがある。だから、あきらめないでせいいっぱいがんばりたい。」「夢が見つかるように、苦手なこともがんばっていきたい。」等、夢や目標をもつことの大切さ、そして、目標に向つて努力することは多様にあると気づいた内容であった。命を大切にし、夢や目標を実現するためには、日々精一杯生きることと、いろんな人たちとかかわりのある日常生活を大切にすることにつながるということを、自己を見つめさせることで考えさせることができた。

表14 目標達成にむけ、どんなことをがんばつたらいいですか？

〈導入での児童の声〉

A 児	B 児	C 児
○スイミングがある時は、一日も休まないで、毎日、泳ぎの練習をがんばる。	○まんが家になりたいから、絵を描く練習をやればいい。	○とくに目標はない。

〈展開後段で書く活動を取り入れ自己をふり返った感想〉

A 児	B 児	C 児
○ぼくは、水泳選手になりたい。谷亮子選手は、柔道以外のことものがんばついてすごいなと思いました。やっと金メダルとった時は感動だった。ぼくもスイミングの練習だけでなくいろいろな事をがんばりたい。	○私は、谷亮子選手の強い気持ちや努力が伝わりました。金メダルをとった時、感動した。私はなんでもすぐにあきらめがあることがある。だから、最後までやれるように私もあきらめないでせいいっぱいがんばりたい。	○一生けん命がんばつて生きていれば、夢をかなえられる。でも、私は将来なにになりたいか決まっていない。だから、夢が見つかるように、苦手なこともがんばつていただきたい。

表13 授業後の感想

A児	・テニスプレーヤーになりたいから、朝も夕方も練習している。お母さんが、いつも水とうを準備してくれる。だから、ぼくもだれかに支えられている。谷選手のように、テニスの練習だけじゃなく、宿題も手伝いちゃんとできるようにしたい。
B児	・やっぱりまわりの応えんがあるからこそ、野球もできる。努力すれば自分の力がわかる。失敗すればまた努力する。応えんしてくれる人のためにもがんばる。
C児	・プロ野球選手になりたい。谷選手みたいに、好きなことだけでなく、勉強ちゃんとやらないといけない。あきらめずに谷選手みたいに夢をかなえたい。
D児	・谷選手は夢をかなえてうらやましい。私はインテリアコーディネーターになりたい。だから、谷選手のように、柔道だけじゃなくあたり前だと思えることもがんばって、友達も大切にしたい。私のデザインで、だれかが幸せになれたらしいな。

これらのことから、効果的な資料の選定、提示、発問、導入・展開後段の工夫、書く活動を大切にすることによって、今まで気付かなかつた自分のよさや課題に気付き、目標に向つて努力しようとする意欲が高まつたことがうかがえる。

- (3) 検証の視点3：第1次「生命尊重」、第2次「理想・努力」を関連付けて取り扱うことにより、生命尊重の心を育て、自己の生き方を考えさせることができたか。

図3から分かるように、「自分や周りの人の命を大事にしていこうと思ひますか？」について、「とてもそう思う」が授業前は29%だったものが、1次授業後は36%、2次の授業後は60%まで増えた。

また、表15から、「あきらめず生きること。がんばってのりこえて生きる。」「すべての人を大切にすること。生きることはうれしい。」「がんばって生きることが命を大切にすること。何があっても生きていかないといけない。」等、命を大切にすることは、単に「病気やけがをしない」や「命を粗末にしない」だけでなく、自他の生命を守りつつ、ともに支えあい、日々精一杯生きることだと、考え方も深まっている。

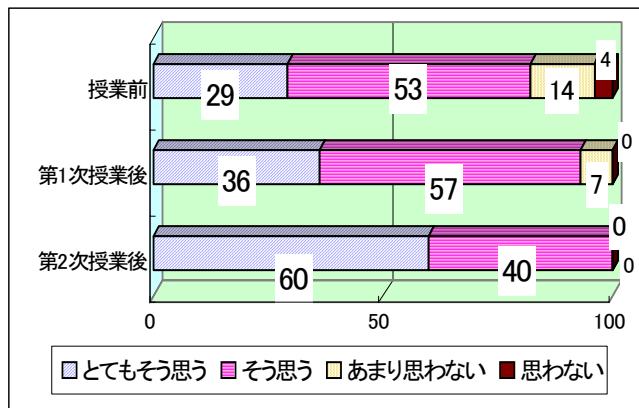


図3 自分や周りの人の命を大事にしていこうと思ひますか？

このように、第1次に「生命尊重」、そして、第2次に「理想・努力」を設定することで、児童の道徳的実践意欲を高める手立てとしては、有効であったととらえる。

表15 第2次の授業後アンケート「命を大切にすることとは、どんなことだと思いますか？」

児童 E	あきらめず生きること。きらいな事でも、一生懸命いがんばってのりこえて生きていく。
児童 F	すべての人を大切にすること。くじけず、努力したらいい事があるから生きることはうれしい。
児童 G	つらいこともあるが、楽しいこともいっぱいできることが、命を大切にすること。
児童 H	生きることはすごいことだと思うから、楽しいことやいろいろな体験ができるから命は大切。
児童 I	この世には苦しんでいる人もいる。がんばって生きることが命を大切にすること。何があっても生きていかないといけない。
児童 J	生きるというのは、がんばれることだと思う。
児童 K	みんなで楽しく生きること。
児童 L	命はすぐ捨てる人もいるけど、絶対にもらえないもの。1つだけの宝物。

IVまとめと今後の課題

生命尊重の心を育て、他者とのかかわりの中で、自己の生き方を考えるような魅力ある道徳の時間にしたいという思いから、心に響く授業の工夫について取り組んできた。その研究の成果と課題は以下のとおりである。

1 成果

- (1) 心に響く資料の選定や提示、導入・展開後段の工夫、及び書く活動を取り入れ、自己をふり返り考えさせることで、自他の生命を尊重する心情を高めることができた。
- (2) 「生命尊重」をふまえ、他の価値項目「理想・努力」と関連付けて取り扱うことで、自己の生き方を見つめ、よりよく生きようとする道徳的実践意欲を高めることができた。

2 課題

- (1) 思いややや宽容・謙虚も関連付け、スキルも身につけさせる等の授業の工夫が必要である。
- (2) 道徳の時間の年間指導計画を見直し、価値項目の関連を図ったり、総合単元的にする等の工夫が必要である。

<主な参考文献>

- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説（平成20年8月）道徳編』 東洋館出版社
 押谷由夫・小寺正一編著 2008 『小学校学習指導要領の解説と展開・道徳編』 教育出版
 近藤 卓編著 2007 『いのちの教育の理論と実践』 金子書房
 有村 久春編著 2005 『命を大切にする教育をどう進めるか』 教育開発研究所